

< 守山教育の充実を図る研究

○小学校英語教育の推進

小学校英語教育推進員 浦谷 昌章

○中学校特別活動の推進

―守山市生徒会サミットの活動―

中学校特別活動推進員 脇阪 久徳

小学校英語教育推進に係る現状と課題

1 はじめに

令和2年度(2021年度)の小学校における新学習指導要領の全面実施に伴い、小学校5、6年生で「外国語科」が導入された。あわせて、これまで高学年で行われていた「外国語活動」は、小学校3、4年生からの実施となった。その目的は、小学校での従来の外国語活動における課題(外国語活動で、音声中心で学んだことが中学校段階での文字への学習に円滑に接続されていないなど)を「教科化」を図ることで、より体系的な学習へと転換し、スムーズに中学校の外国語教育につなぐことである。導入に当たっては、実際に指導を行う現場の小学校教員から「自らの英語に対する苦手意識や指導力への不安」、「これまで以上の負担感の増大への不満」など、多くの声が上がっていたのも事実である。本市においても、当研究所が平成31年度(2019年度)に実施したアンケート調査で、年代に関係なく約8割の小学校教員が外国語の授業への不安を抱えており、その主な理由は、「語彙数が少ないなど、自身の英語力に自信がない。」「外国語の授業を実際に行ったり、参観したりしたことがなく、授業の流れや展開の仕方がわからない。」「ALTとの打ち合わせ時間もなく、授業準備が間に合わない。」「支援が必要な児童への対応」「評価の仕方」などである。導入から2年が経過した今、こうした不安が完全に払拭されたわけではない。2年間の学校訪問(授業参観と指導訪問)を通じて見えてきた本市の英語教育の現状と課題を整理した。

2 現状について

この2年間、学校教育はコロナ禍の影響をまともに被り、本来の正常な学校の姿からかけ離れた状況が今なお続いている。外国語が教科化となった初年度は、コロナ感染拡大防止対策として4月当初から全国一斉に学校の休校措置が取られ、結果的に新学期のスタートは、6月に入ってからとなった。約2か月間、小学校英語教育推進員としての本来の役割を果たすことができなかったが、この間を利用し、学校再開に向けた学校訪問の準備を整えることができた。市内9小学校を訪問し、外国語授業(本市では、「英語活動」ならびに「英語科」授業)を参観するとともに指導助言等を行うことにより、英語教育の充実を図ることがその主な役目である。こうして6月以降、学校訪問が本格的にスタートした。

学校訪問は、毎月の「学校訪問計画」により実施した。学校規模が異なることから、学級数(小学3~6年生)に応じた計画となっているため、大規模な学校ほど必然的に訪問回数が増えている。ただ、各小学校により英語教育や授業改善等に関する異なった課題があるため、規模の大小に関わらず学校長の要請により、そうした課題の解決につながるよう柔軟に対応できるようにした。

本市では、新学習指導要領の移行期間を含め、英語活動ならびに英語科授業において、英語専科指導教員(以下、「専科教員」という)が配置されている。昨年度以降、4名の専科教員が複数校を掛け持ちながら英語授業にあたっている。ただ、4名の専科教員が市内全ての英語授業を網羅しているわけではなく、専科教員が配置されていない学級では、学級担任が主体となって授業を行っている。4名の専科教員は経験年数も異なるが、それぞれのキャリアに基づく確かな英語力を発揮し、日々の授業実践に取り組んでいる。一方で、学級担任が主体となって行う英語授業では、冒頭にも述べた自身の英語力や英語指導力への自信のなさが払拭しきれずにいる教員もみられるが、学級担任としての優れた学級経営力や指導力を発揮し、子どもたちが、伸び伸び、生き生きと楽しく取り組む英語授業づくりを実践している学級担任の先生に出会うこともできた。コロナ禍で研修もままならない中、前向きに英語の授業づくりに取り組んでいる多くの先生方に敬意を表し、現状報告とする。

3 課題について

2年目を迎えた今年度は、コロナの変異種による第4波による感染拡大も懸念されていたが、比較的落ち着いた状況で新学期がスタートした。4月から開始した学校訪問では、取組の重点として授業参観での「授業（観察）評価」を実施することとした。ここでは、その評価結果に基づき、本市英語授業における課題を整理する。

学校訪問での授業参観を行う際に、次の6点を授業観察ポイントとし、その評価を行った。

- ① 楽しい雰囲気（テンポとリズム）の授業づくりができています。
- ② 本時のねらい(Today's Goal)がしっかり提示されている。
- ③ ねらい達成に向けた活動のつながりがある。
- ④ 「ふり返しシート」を活用した授業のふり返りができています。
- ⑤ 積極的に Classroom English が使われている。
- ⑥ ALT との協働授業ができています。

英語科における専科教員と学級担任の授業評価を比較したものが下表である。5段階評価（5：非常によい、4：よい、3：普通、2：よくない、1：非常によくない）で「3」以上の評価の割合を示している。全体的には、専科教員の授業評価が学級担任の授業評価より高くなっている。特に、評価観点「1」や「6」については英語力に裏付けされた英語特有の指導法など、専科教員の方が優れている結果となっている。ALT との協働授業を行う上では、事前の打ち合わせ等が重要で、そのためには会話能力やコミュニケーション能力が欠かせない。英語力の差は、評価観点「5」でも顕著に表れている。評価観点の「2」「3」「4」は、毎時の授業づくり(Teaching Plan)の骨子となるものである。これは、英語に限らず全ての教科に共通した授業づくりの基礎・基本である。特に、授業の「ふり返し」については、専科教員、学級担任を問わずやや低い評価となっている。「ふり返し」が本時のねらいとしっかりと整合しているか、次時の学習への意欲付けとして機能しているかなど、「ふり返しシート」の内容の再検討と合わせ見直す必要がある。また、「ふり返し」がシートに記入するだけの活動にとどまってしまっているのも課題の一つである。優れた授業では、しっかりと時間が確保され、「ふり返し」の交流が行われていた。思いや課題をみんなで共有することが、次時への意欲付けとなる。学級担任の授業においては、評価観点「3」の結果が特に低く課題がある。Teaching Plan 作成時における前後の活動のつながりを意識した授業づくりを心がけること。最後に、小学校段階では英語の楽しさをしっかりと味わわせてほしい。市内では、English Room を設けている学校が2校ある。一步教室に入ると、そこには English World が広がっている。

こうした学習環境の整備も「楽しく英語を学ばせる」ための重要なファクターの一つである。

評価の観点	専科指導教員	学級担任
1. 楽しい雰囲気（テンポとリズム）の授業づくり	100 %	79 %
2. 本時のねらい(Today's Goal)の提示	89 %	82 %
3. ねらい達成に向けた活動のつながり	91 %	28 %
4. 「ふり返しシート」を活用した授業のふり返し	70 %	54 %
5. 積極的なclassroom Englishの使用	98 %	59 %
6. ALTとの協働授業	100 %	54 %

【小学5、6年生 英語科授業評価表：2学期末集計結果】

4 おわりに

令和4年度(2022年度)から小学校においては、外国語を含め複数の教科で「教科担任制」が導入される。また、デジタル教科書の無償配布(先行して英語教科書での実施)も始まる予定で、デジタル化への対応がますます重要となる。コロナの終息が見通せない中で、学校は多様な価値観や様々な変化への対応が求められている。教員一人一人のバランスのとれた総合的な教師力の向上をめざし、今後も持続可能な自己の「研鑽と変革」が期待される。

中学校特別活動の推進

—守山市生徒会サミットの活動—

1 はじめに

市内 4 中学校の中学生がつながりを深めることでいじめをなくしていこうと、2015 年(平成 27 年)に守山市クローバープロジェクトが発足し、翌年には県立守山中・立命館守山中の 2 校を加え、6 校で活動を行ってきた。今年度からは、生徒の自治能力や主権者として積極的に社会参画する力をさらに伸ばしていくことを目的とし、今までのクローバープロジェクトの取組を発展させ“守山市生徒会サミット”として発足した。

2 生徒会サミットの目的

生徒自らが自分たちの生活をよりよくしていくために、課題解決に向け自主的・主体的に取り組み合意形成を図る。また、市内の公立中学校や私立中学校の生徒代表が情報交流や意見交流を図ることで、次代を担うリーダーを育成するとともに市内中学校全体の生徒会活動の活性化を図る。

☆中学校特別活動指導要領より

特別活動全体を通して、自治能力や主権者として積極的に社会参画する力を育てることを重視し、学級や学校の課題を見だし、よりよく解決するため話し合っ合意形成をする力を養う。

<目標>

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
 - (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
 - (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活および人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。
- 生徒会において、学校全体の生活をよりよくするための課題を見だし、その解決のために話し合い合意形成を図ったり、意思決定したり、人間関係をよりよく形成したりすることができるようにする。
 - 自治的な集団における活動を通して身に付けたことを生かして、多様な他者と共働し、学校や地域社会における生活をよりよくしようとする態度を養う。

3 活動の経過

(1) 第 1 回守山市生徒会サミット

期日: 令和3年6月13日(日) 13時15分から16時30分

場所: 守山市立図書館

概要: 各校から実践発表と課題を報告し、課題の共有を図る。その後、市内中学校全体で取り組んでいく課題を明確にし、今後の取り組み方針についての合意形成を図った。

市内中学生 生徒会役員 28人

一般参加 教育長など

事務局 20人

○合意形成事項

①今年度守山市生徒会サミットとして取り組む課題

「SNSの利用方法やスマートフォンの使い方」

②今後の取組方針

- ・アンケートを実施し、客観的な目線から現状を正しく理解する。(保護者へのアンケート、自分たちへのアンケート)
- ・各校の現状から市内全体で取り組む具体的方針を考える。



- ・8月下旬に開催予定の第2回守山市中学生サミットで、「SNS の利用方法やスマートフォンの使い方」についての、具体的取組方針を決定する。
- ・守山市 PTA 連合会、守山市青少年育成市民会議等との連携を図る。
- ・9月 各校で守山市生徒会での取組方針を周知する。

(2)第2回守山市生徒会サミット

期日:令和3年8月5日(木) 午後1時15分から午後4時45分

場所:守山市生涯学習・教育支援センター

概要:それぞれの中学校の保護者と生徒に対して行った、スマートフォンに関する意識・実態調査アンケートから、各校の結果と考察等を発表し、共有を図った。その後、「SNS の利用方法やスマートフォンの使い方」に関して、市内中学校全体で取り組む方針を決定するとともに、市内統一の「活動スローガン」を決定した。

参加者: 市内各中学生 生徒会役員	26人
守山市 PTA 連絡協議会	1人
守山市青少年育成市民会議	9人
一般参加 教育長など	9人
事務局	15人
	計 60人



○合意形成事項

① SNS・スマホの利用に関して 守山市内統一活動スローガン

スマホを使いすぎいませんか?「スマホ働かせ方改革」
 その1 スマホに住まいをあげよう
 その2 スマホに休憩をあげよう
 その3 スマホの残業を減らそう

②今後の取組方針

- ・事務局でポスターやのぼりの制作を行う。
- ・2学期の始業式で、各校でポスターやのぼりを使い全校生徒に周知する。
- ・第3回生徒会サミットは12月上旬に開催予定。

(3)第3回生徒会サミット

期日:令和3年12月11日(土) 午後1時15分から午後4時30分

場所:守山市民ホール学習室

概要: 今回のサミットは各校とも新生徒会として発足したメンバーが集った。教育長からの激励の言葉や先輩の体験談などから、一人ひとり気持ちを新たに意欲を高める姿が見られた。また、交流会(アイスブレイク)では、学校間の枠を超えて互いに交流を深め、その後のグループ協議や全体協議では、初対面とは思えないほど活発に話し合いが行われ、充実した時間となった。

参加者: 市内各中学生 生徒会役員	25人
一般参加 教育長など	6人
事務局	11人
	計 42人



○合意形成事項

①2021-2022 守山市生徒会サミットスローガン 「六校∞色 (Six Schools Endless Color)」

②今後の取組方針

- ・前年度の「スマホ働かせ方改革」に関する取組を検証する。
- ・検証を基にして、どの学校もより工夫した取組を実践する。

- ・今後の取組には、スマホの使用時間に関するものだけでなく、タブレットや SNS の利用等に関することも含める。(以下、スマホ等に関する取組)
- ・令和4年6月に実施予定の第4回サミットにおいて、スマホ等に関する取組および各校で独自の取組(例:あいさつ運動など)の実践報告を行う。再度そこで協議し、その後の市内6校で共通して取り組む課題を明らかにする。

4 成果と課題

活動に参加した生徒の感想に、「他の5校の皆さんと話し合うことで、各校に共通する課題や、その実態について知ることができました。また、積極性のあるメンバーがそれぞれ意見を持つことで、繰り広げられた話し合いに楽しさを覚えました。(生徒感想 一部抜粋)」や「他の学校の生徒会の皆と意見が交流できてとても楽しかったし、自分の学校のことを客観的に見られるよい機会となりました。話し合いも白熱して、皆が守山をよりよくしようと頑張っているんだなと思いました(生徒感想 一部抜粋)」と、あるように、どの回のサミットでも積極的な話し合いが行われ、課題解決に向け自主的・主体的な活動を行うことができた。

会議の中で、それぞれの学校の実践を交流しあうことで、生徒会メンバーで行う劇や、昼食時に流す人権啓発 CM などを、自校の取組にも取り入れてみようという気概が生まれ、市内生徒会活動の活性化が図れた。また、青少年育成市民会議や守山市 PTA 連絡協議会とも連携することにより、保護者や地域の大人に対しても、今の中学生の姿や課題解決に向けての取組を発信できたことは大きな成果であった。

青少年育成市民大会で活動成果を報告する機会を得たことなどは、自分の思いを自分の言葉で伝える表現力も高められたとともに、発表者にとっても大きな自信にもつながった。

課題としては、生徒会役員以外への周知を広げ全校的な取組へと、つなげていくこと。また、年間を通して、計画的・継続的に開催していき、守山市内の生徒会活動の大きな柱として育てていけるように指導体制の確立と育成も大きなカギの一つである。